

「日本の子育て支援について、看護師として4人の子供の母親として願うこと」

医療福祉ジャーナリズム分野 修士2年 今岡 康子

お二人のお子さんを日本で育てることで、特に娘さんが大変だったというお話に、とても共感し親近感が湧きました。(ほどほどのプライバシーの曝露も時には必要不可欠なのかなと思いました。)

私にも、大学生から高校生の4人の子供がいますが、これまでの自分の子育てについて振り返った時に1番大変だと思ったのは、子供が1人から2人に増えたときでした。(3人目以降は、3人も4人も一緒という心境になりましたが。)ちょうど同時期に出産と転勤が重なったことと、幼稚園でも小学校でも、父親ではなく母親が参加することが当たり前前の行事や手伝いが多く、乳幼児を2人連れての行動はとても大変な思いをしました。また子供が多い分、お母さん同士の関りも増え、まだ幼い子供の習い事に熱心なあまり余裕のないお母さんや、同じ兄弟でも兄だけに辛くあたり可愛く思えない。といったお母さん達の悩みを聞くこともあり、子育てが妻任せの専業主婦の母親の方が悩みを抱え、特に1人目の子供で幼稚園に入るまでの期間の支援は重要だと思いました。

フィンランドでは親による子供の虐待死がないというのは、ネウボラという出産・子育て支援がシステムとして構築され、サポート体制がしっかりと整っていることによるものだということがわかりました。日本では激しい虐待の末、命を落とす子供が増えています。この世に生まれてきても、親からの愛情が受けられず、また満足に食べることが出来ず、唯一学校給食が栄養源になっているという悲しい現状や「子ども食堂」なるものも増えつつあります。

医療者の立場として、ネウボラのように妊娠がわかった時から母子を担当し、継続して成長を見守っていけるのは、とてもやりがいのある仕事だと思います。しかし、現状から継続支援ができるかと考えた時、妊娠から出産までは医師の診察を中心に病院で、産後は定期的に乳幼児健診等の保健センターでと別々の施設になり、保健師業務も、高齢者対応に追われ、健康指導の企画、乳幼児検診とその場限りの完結型になっています。医療の専門職者の考え方そのものが医学モデル中心の教育を受け、非常に効率化を重視し、専門職による分業化が明確になったことで、“重なり”の部分も見落とされています。

母親の立場で考えると、健診のついでに立ち寄り、顔見知りの保健師さんと世間話の延長で、「ちょっと聞いてみよう」と気軽に相談でき、子供の成長を共に喜んでくれる人がいてくれるのは心強いと思います。もう少し幅広い年代の専門知識を持ち、子育て経験を活かした「おばちゃん」的な人材がいてもいいのではないかと思います。おばちゃんが語る体験談は、患者会のピアサポートのように「私だけではないんだ」と共感を生み頑張る力になるのではないかと思います。

子育ては、振り返ってみると大変な時期は一時期ですが、その渦中にある時は無我夢中であり、共働き世帯が増えていても、まだまだ母親だけに育児も家事も負担がかかる現状に、性別に関係なく働き方、考え方そのものの見直しが必要になってくるのではないかと思います。そのための知識としての教育が大切であり、今の若い親世代が子供を大切に育てていけるよう、しっかりとサポートするための人材と人材育成に財源を確保し、医療者も共に歩む伴走者というスタンスで教育していく必要があると思います。そして、この世に生を受けたすべての子供たちがたくさんの愛情を受け大切にされる経験を持ち、虐待を生み出す社会がなくなることを願ってやみません。